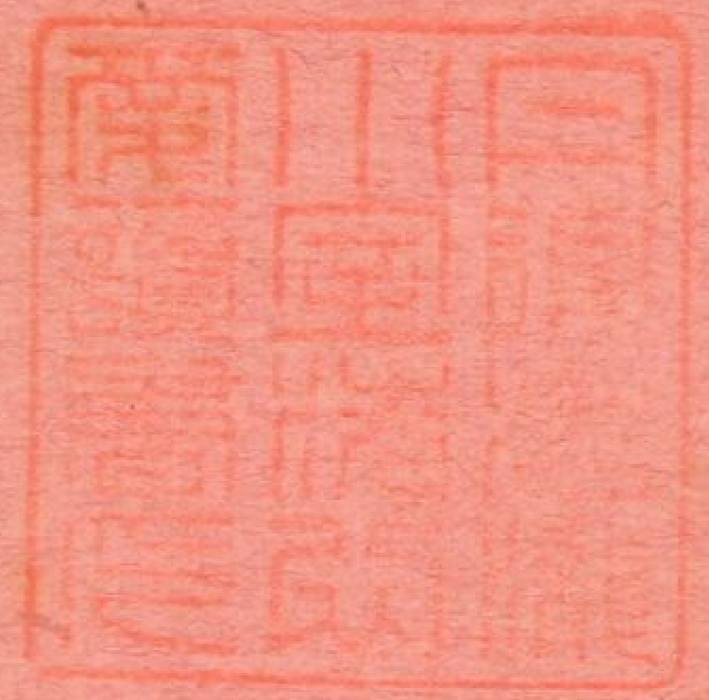
涼
國府犀東編
中庸堂發兌



Glubend trifft mich der Sonne Pfeil,
still li gen die Weste,
    Nur der Lerche Gesang wirbelt
    in heiteren Luft.
Doch jetzt braust's aus dem nahen
Gebüsch; tieb neigen der Erlen
    Kronen sich, und im Wind wogt das
    versilberte Gras;
Mich umbängt ambrosische Nacht; in
duftende Küh'ung,
    Nimmt ein prächtiges Dach
    schattender Buchen mich ein.
Indes Waldes Geheimnis entblicht mir auf
einmal die landschaft,
    Und ein schlängelnder Pfad leitet
    mich steigend empor,
Nur verstohlen durchdringt der Zweige
laubigtes Gitter,
    Sparsames Licht, und es blickt
    lachend das Blaue herein,

燒くごとく太陽の箭が我を射り、西風は風止ぎて、
たゞ雲雀の歌が、爽なる空氣の内に渦まく。
さりながら今近き藪が物騷ぎ、深く傾く赤楊（ハンノキ）の、
梢が、さてば風の爲めに、光る草が靡く。

我を神聖なる闇が取巻き、香へる涼さにて。
蔭させる栢の樹の、莊嚴なる屋宇は我を掩ふ。

森の奥深きに入れば、我に乍ち田舍が去り、
逶迤（ウネ）れる逕が、我を上らしめつゝ導き、
たゞ窃かに、杖の若葉の格子を貫く。
僅の光が。さて笑みながら藍色が瞰く。

Über Plötzlich Zerreisst der Flor. Der geoffnete Wald giebt,
Überrashend des Tags blenden dem Glanz mich zurück,
Unabsehbar ergiesst sich vor meinen Blicken die Ferne,
Und ein blaues Gebrirg' endigt im Dufte die Welt,
Tief an des Berges Fuss, der jählings unter mir abstürzt,
Wallet des grünlichten Stroms fliessender Spiegel vorbei.
Endlos unter mir seh' ich den Aether, über mir endlos,
Blicke mit Schwindelm hinauf, blicke mit Schandern hinab.
Aber Zwischen der ewigen Höh' und der ewigen Tiefe,
Trägt ein geländerter Steigsicher den Wandrer dahin.

"Der Spatzergang."
Schiller.

さりながら突然淡暗さが裂ける。開かれたる野が、
襲ひつゝ日のまばゆき光に我を戻らしむ。
見るべからずに、我が目撃の前に遠方が現はるる、
青き山が霞にて、世界を終へしむる。
深く崖に沿ふて、急激に我が下に落下せる、
緑なる流の注げる、鏡が我が前に漲る。
限なく我が下に我はエーテルを見る、我か上にも限なく、
眩ひもて上を見上げ、怖もて下を見下す。
さりながら限なき高さと、限なき深ささの間に、
道ある阪が定かに、遍歴の人を導き去る。（散策、シルラル）

はしがき

真金とろけて、土も裂けるまで、火の龍が、炎を吐くといふ夏の日は、暑くろしく、又ものうしくて、涼しき風の通ふべき、すだれの下か、まどのへか、又は木かげ、石の上、あるは籐の長椅子、網釣床に、仰向けざまに臥して、午睡の夢に、南華の仙郷に遊ぶの外、他の術もなし、宰予の晝寝を、仲尼は、朽ちたる木、糞土の垣と、いひしかど、その仲尼さへ、水を飲み肱を曲げて睡る、樂其中に在りとて、自ら午睡の味を語りしには、あらずや、されば午睡の枕につきて、聖人の域、羽人の宮に遊ばんは、こよなきことゝかや、されど暑さになや

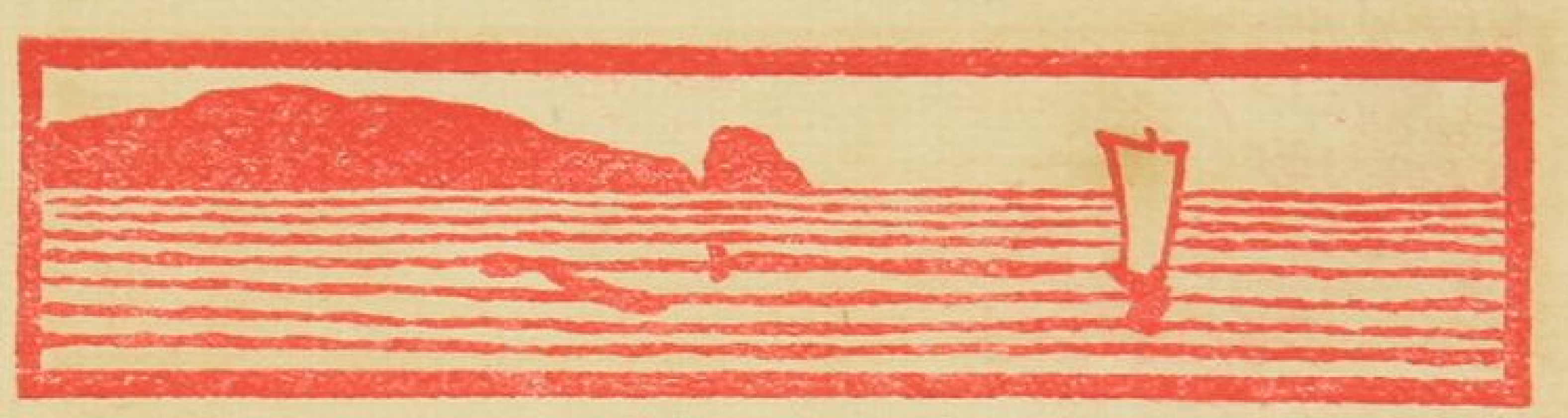
みて、清き呼吸を、汚れなく罪なく、夢に引き入れられざらんには、とても聖人の域、羽人の宮へ往くは、覺束なかるべし。清き呼吸を引き入れらるゝ秘訣に、此卷は編み成されしと知れ。よみながら手より、此卷の落つるも覺えず、鼾もろとも羽化登仙の、車の初きしりを鳴らして、何れの世界に遊び給ふも、そは自由也。清く臥し、清く睡むり、清く夢みんとの人は、此卷必らず枕に簟に伴ふべし。さすれば、其功德によりて、清淨無垢の境に導かるべし。門の涼み、橋の涼み、舟の涼み、高殿の涼み、何れの涼みにも、此卷よめる人は凡べて惡魔の災難を免れん。

辛丑の夏滬上にて

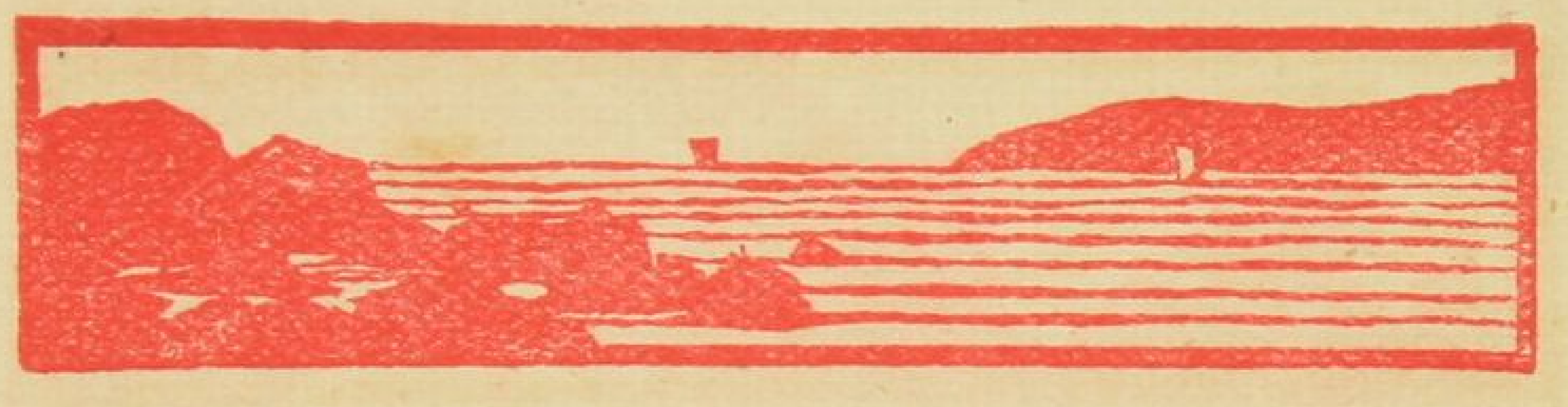
さいとうしるす

南磵科頭。可レ任ニ半嶺明月一。

北牕坦腹。還用ニ一榻清風一。



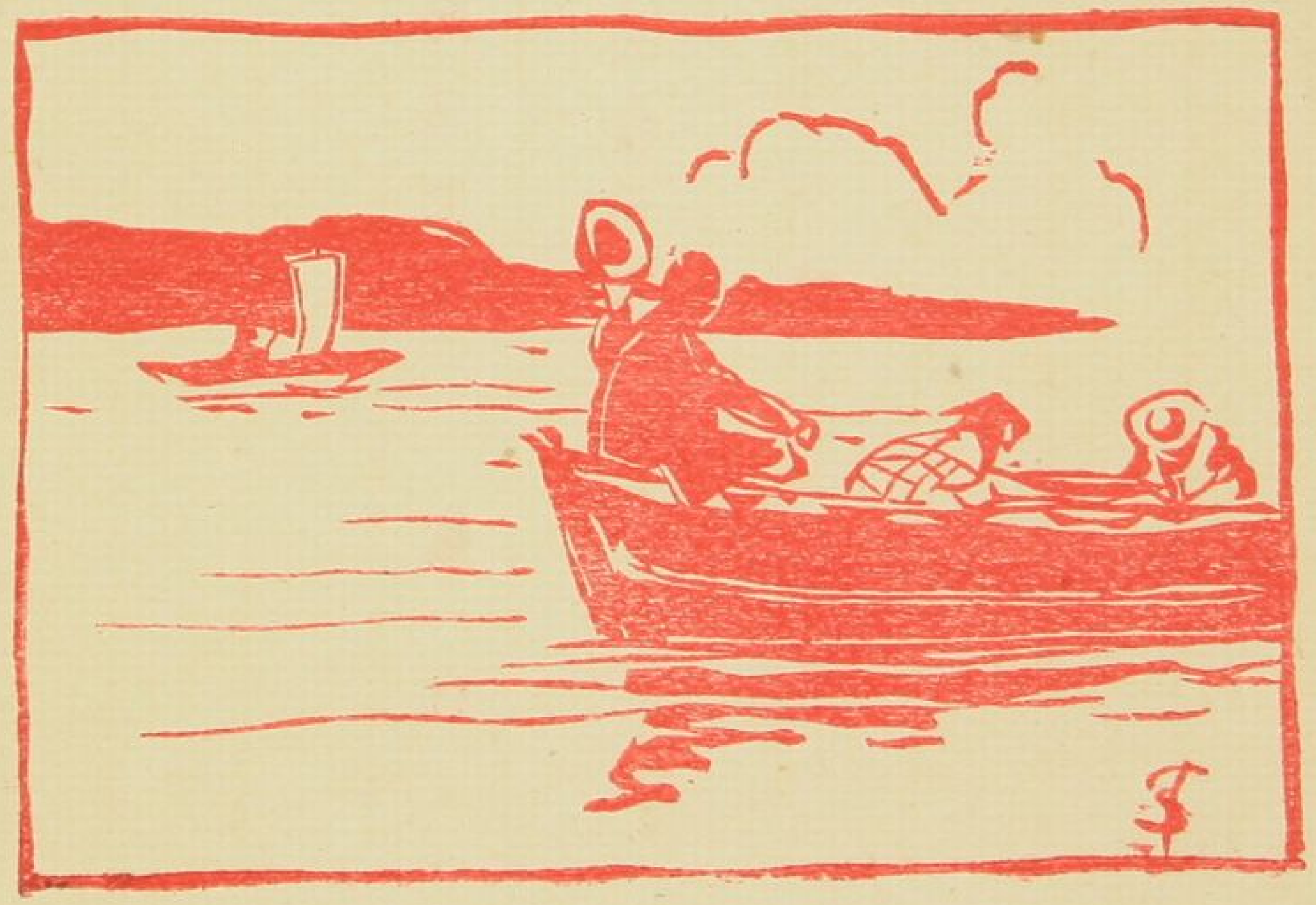
手をうてば谺に明る夏の月　芭蕉
涼しさを我やどにしてねまる也
涼しさを絵に寫しけり嵯峨の竹



心太逆しまに銀河三千丈　蕪村
宗鑑に葛水給ふ大臣かな
細脛に夕風さはる簟

涼目次

◎白雲巖泉
◎箕踞長嘯
◎峨眉瀟湘
◎短琴長謳
◎焚香讀易
◎月榭雲房
◎飛泉空翠
◎野人閑夫
◎雲谷月空



◎鐵笛吹殘

◎竹影蕉陰

◎茂樹終日

◎個趣個機（以上古人語）

◎夕立の記（徳川光圀）

◎晝寐の解（得巴兮）

◎竹夫人傳（壺峯）

◎影法師（吐月）

◎月見賦（芭蕉）

◎名月辭（圭雨）

◎凉風萬斛（以下俳句）

◎石枕松風

◎無腔短笛

◎篩風梳月

◎兩腋生風

◎松氣健人

◎鬚眉皆碧

◎撫松看雲

◎蕉天苔地

◎松冷巢雲

◎嬌嬌出塵
◎魚影水鑑
◎淡雲凉月
◎孤揖沿流
◎繪月繪水
◎銀河水簾
◎靜雲淺夢
◎葛衣紈扇
◎雲卷雲舒
◎一鼓天風

◎長晝如年
◎几簟皆綠
◎空翠撲人
◎蕉衫如雪
◎鷗邊鷺背
◎石澗林瀑
◎凉影參差
◎碧玉潺湲
◎冰絲雪藕
◎如幻如電

○涼氣沁骨
○金露銀露
○過雲跳珠
○如笏如矛
○水落石出（以上俳句）
目次終

Beyond the limits of the shadow cast
By the broad hill, glistened upon our sight
That gay assemblage. Round them and above,
Glitter, witt dark recesses interposed,
Casement, and cottage-roof, and stems of trees
Half-veiled in vapoury cloud, the silver steam
Of dews fast melting on their leafy boughs.
By the strong sunbeams smitten, like a mast
Of gold, the maypole shines; as if the rays
Of morning, aided by exhaling dew,
With gladsome influence could re-animate
The faded garlands hanging from its sides.

The Solitary, in“ The Excursion”.

Wordsworth.

投られたる影の限を超えて、
廣き丘の爲めに、吾等が視線の上に輝く、
彼の樂しき村里が、彼等の周りにさてはそか上に、
光かゝる、遮ぎられて暗く明に隱れつ見えつ、
窓翼も、さて茅屋の軒も、さて樹々の幹も、
霧の如き雲に半ば罩はれて、銀色なる蒸發氣は、
露の、十分にそが青葉茂る枝々の上に融けつゝ、
强き太陽の光線に打れて、一の帆檣の如く、
黄金なる、五月空の北斗が耀く、恰かも光が、
曙の、氣發せる霧に助けられて、
樂しき威力にて、再び光らせるかの如く、
その星がめぐりにかゝる、薄らげる花冠なば。

凉

白雲巖泉

犀東居士編

白雲徘徊して、終日去らず。
巖泉潺湲として、一支盡きず。
廬を人境に結んで、杖を山阿に植つ。
林壑は地の豊にする所、煙霞は性の適する所。

高山に上り、廻溪を窮め、
深林に入り、曲澗に下る。
幽泉怪石、遠として到らさるなく、
到れば則ち、草を拂つて坐し、壺を傾けて醉ふ。
醉へば則ち、更に相枕籍して臥す。
意亦甚だ適し、夢亦趣を同うす。

竹籬茅舍、石屋花軒、
松栢は群がり吟して、藤蘿は景を翳し、
流水戸を遶りて、飛泉簷に掛り、
煙霞捿まらんと欲して、林壑將さに瞑ならんとす。
中に野叟山翁の四五を處らしめ、
余閒身を以て、此中の主人と作り、
坐に紅燭を沈たらしめ、青山を看遍うす。
我情腸を消して、他の冷眼に任す。

半塢の白雲、耕せども盡きず、
一潭の明月、釣つて痕なし。
茅檐の外、忽ち犬の吠え雞の鳴くを聞くに、

恍として雲中の世界の如し。
竹牕の下、唯だ蟬の吟し鶲の噪ぐあり、
方さに靜裡の乾坤を知んぬ。

竹風一陣、茶竈の疎煙を飄颺し、
松月半彎、書牕の輕帳に透徹す。
厨冷かにして、山翠を分ち、
樓空うして、水煙を入る。

門を閉ざて、佛書を閲し、
門を開いて佳客に接し、
門を出てゝ、山水を尋ぬ。
此れ人生の三樂たり。

閑牕に高臥す。
緑陰の淸晝、
天地何ぞ其れ寥廓たるや。

箕踞長嘯

九山の散樵、俗間に屏跡し、
徜徉自ら肆にす。
佳山水の處に遇へば、盤礴箕踞して、
四顧人なくんば則ち、劃然として長嘯し、
聲は林木に振ふ。
客あり榻に造つて、與に語る。
對へて曰ふ、『余方さに華胥に游び、義皇に接す。

未だ君と語を理むるに暇あらず』と。
客の去留、蕭然として意となさず。

客散じて門扃ざし、風微にして日落つ。
壁月皎々として空に當り、花陰徐々として地に滿つ。
近き檐の鳥宿、遠き寺の鐘鳴、
茶鐺初めて熟し、酒甕乍ち開く。
八韵の新詩を成さずんば、畢竟一個の俗氣。
秋月天に當つて、纖雲都べて淨し。

空濶の處に露座すれば、清光冷にして此身を浸す。
水晶宮裡に在るが如く、人をして心膽澄徹せしむ。

佛國都無寒暑。仙都長似三春。

峨眉瀟湘

一草堂を結ぶ。
南は洞庭の月、北は峨眉の雪、
東は泰岱の松、西は瀟湘の竹、
中に晉の高僧、支法が八尺の沈香牀を具へ、
温泉に浴みし罷んで、牀に投じて鼾睡す。
此を以て暑を避く、樂不樂也。

冬起は遲からんことを欲し、夏起は早からんことを欲す。
春睡は足らんことを欲し、午睡は少からんことを欲す。

江に溪畔に從ひ、石上に嘯傲して、
水聲の浩々潺々、淋々冷々たるを聽く。
恰かも一部天然の樂韻に似たり。
湘靈の水中に在つて、瑟を鼓するありと疑はる。

少うして琴書を學び、偶ま清淨を愛す。卷を開いて得るあれば、便はち欣然として食を忘れ、樹木の交はり暎じ、時鳥の聲を變するを見て、亦た復た歡然として喜ぶあり、常に言ふ、五六月、北牕の下に臥し、涼風の暫く至るに遇へは、自ら羲皇上人と謂ふ。

短琴長謳

斑竹林中に舒嘯して、青石磯上に徙倚す。

有る所の道笈梵書、或は校讐すると四五字、或は參諷すると一両章。茶は甚だ精ならず、壺亦　ならず、香甚だ良からず、灰亦死せず。短琴には、曲なくして絃あり、長謳には、腔なくして音あり、激氣は林樾に發して、好風之を水涯に達す。若し羲皇の以上に非ずんば、定めて亦嵇阮兄弟の間ならん。

千巖は秀を競ひ、萬壑は流を爭ふ。
草木其上を蒙籠して、雲興霞蔚の如し。
石に臥して斜なるを嫌はず、
石を立てゝ細なると嫌はず、
石に倚つて薄きと嫌はず、
盆石は巧なるを嫌はず、
山石は拙なるを嫌はず。

混跡塵中。高視物外。陶情杯酒。潛心詠篇。藏名一時。尙友千古。

焚香讀易

雨過ぎて涼を生じ、境閑にして情適す。
隣家の笛韵、晴雲斷雨と逐ふ。
之を聽いて聲々肺腸に入る。

書屋の前、曲檻を列ねて花を栽し、
方池を鑿つて月を浸し、活水を引いて魚を養ふ。
小牕の下、香を焚き易を讀み、

淨几を設けて琴を皷し、疎簾を捲いて鶴を看る。

蒼海の日、赤城の霞、峨眉の雪、巫峽の雲、
洞庭の月、彭蠡の煙、瀟湘の雨、廣陵の濤、
廬山の瀑布、
宇寅の奇觀を合せて、吾が齋壁に繪にし、
少陵の詩、摩詰の畫、左傳の文、馬遷の史、
薛濤の牋、右軍の帖、南華の經、相如の賦、
屈子の離騷、
古今の絶藝を收めて、我が山牕に置く。

隱逸林中無榮辱。道義路上無炎涼。

月榭雲房

凉を箑に取るは、清風の徐ろに來るに若かず。
水を槹に激するは、甘雨の時に降るに若かず。

月榭には欄に憑り、飛んで縹緲を凌ぎ、
雲房には戸を啓き、坐して氤氳を看る。

書を讀むは、竹外に溪の流るゝが如く、
逌然として往く。
詩を詠するは蘋末に風の起るが如く、
勃焉として揚る。

一篇軒快の書を讀めば、
宛かも山靑うして水白きを見、
幾句伶俐の語を聽けば、
岳の立ち川の行くを看るが如し。

錦を心に藏し、繡を口に藏し、
珠玉を咳唾に藏し、珍奇を筆墨に藏し、
時を得ば則ち、冊府に藏し、
時を得ずんば則ち、名山に藏す。

彩筆空に描けば、
筆は色を落さずして、空亦染を受けず、
利刀水を割れば、
刀は鍔を損せずして水亦痕を留めず。

花に澆ぎ竹を種ゑ、琴を聽き鶴を玩び、
香を焚き茶を煎じ、舟を泛べて山を觀、
意を奕棋に寓して、他樂ありとも吾は易へず。

竹裡より樓に登つて、遠く韵士を窺へば、
其名理を坐上に談するを聆くに、人我の相忘るゝあり、
花間に石を掃つて、時に棋師を候へば、
其危刧に枰間に應ずるを觀るに、勝負の機はや決しぬ。

六經をば庖厨となし、百家をば異饌となし、
三墳をば瑚璉となし、諸子をば皷吹となし、
自ら奉じ得て大奢なく、客を請ふて未だ必しも能く享けず。

古人特に松風を愛し、庭院皆松を植へり。
其响を聞く毎に、欣然として其下に往き、
曰ふ、此れ十年の塵胃を浣ひ盡すべしと。

凡名易レ居。只有二清名一難レ居。凡福易レ享。只有二清福一難レ享。

飛泉空翠

飛泉數點雨にして雨に非ず、
空翠幾重山の又山。
樹影は牀に横はり、詩思平にして枕外を凌ぎ、
雲華は紙に滿ち、字意隱れて筆先に躍る。
蔭松栢兮掬清泉。

月は洞庭に浮びぬれば、星は彭澤に搖く。
靜夜の鐘聲を聽けば、夢中の夢を喚び醒ましめ、
澄潭の月影を觀なば、身外の身を窺ひ見ん。
暑を深林に逃れば、南風は樹を逗す。
帽を脫し頂を露はし、李を浮べ瓜を沈め、
火宅炎宮、蓮花忽ち迸ばしる。
之を陶潛が、北牕の下に臥して、
自ら羲皇上人と稱するに較べば、

此樂半ばに過ぐ。
景澄めば、岩岫に鏡を開き、
風生ずれは、芳林に芬を流がす。

巻を披いて餘閑あらば、
客を留めて坐殘す夏夜の月、
帷を褰げて別務なければ、
童を呼んで喝破す遠山の雲。

茅齋獨坐して、茶頻りに煮ゆ、
七椀の後、氣爽にして神清く、
竹榻斜に眠つて、書漫に抛つ、
一枕の餘、心閑にして夢穩なり。

雨を帶びて時あつて竹を種へ、
門を關ざして事なく花を鋤す。
筆を拈じて閑に舊句を删じ、
泉を汲んで幾びか新茶を試む。

白雲天に在り、明月地に在り、
香を焚き茗を煮、偈を閲し經を飜へす。
俗念都べて捐て、塵心頓に盡く。
暑中嘗て默坐し、澄心閉目して水觀を作す。
之を久うして髐髪洒々として、
几閣の間に、爽氣あるに似たるを覺へり。

野人閑夫

邱中に枕を高うして、世外に名を逃れ、
耕稼して王稅を輸し、采樵して親顏に奉じ、
新穀旣に升りて、田家大に洽にして、
肥羜煮て以て神に享し、枯魚燔て而して友を召く。
簑笠は戸に在り、桔槹は空しく懸る。
濁醪相命して、缶を擊つて長歌す。
野人の樂や、足れり。

余嘗て一室を淨うして、一几を置き、
幾種快意の書を陳べて、一本の舊法帖を放ち、
古鼎に香を爇き、素麈に塵を揮ひ、

意思少しく倦みて、暫らく竹榻に休み、
餉時にして起き、苦茗を啜り、
手に信せて漢書幾行を寫し、
意に隨つて古書數幅を觀る。
心目の間、洒々として靈空なるを覺ゆ。
面上の俗塵、當さに亦撲ち去るを三寸なるべし、
獨り丹房に坐して、瀟然として無事、
茶の一壺を烹、香の一炷を燒き、
達磨面壁の圖を看、簾を垂ると少頃、

覺えす心淨うして神淸く、氣柔にして息定まり。
濛々然として、混沌境界の如し。
意ふに達磨を揖し、之と與に槎に乘つて、
麻姑を見し也。

月を累ねて獨處し、斗室蕭條たり。
雲霞を取て伴侶とし、靑松を引て心知とし、
或は稚子老翁、閒中に來り過ぎり、
濁酒一壺、蹲鴟一盂、
相共に喫口を開き、談ずる所浮生の閑話、

絶へて市朝に及はず、客去て門を闔ざし、了に報謝なし。是の如く餘生を畢らば足れり。

山中に三樂あり、
薜荔は衣とすべし、繡裳を羨まず。
蕨薇は食ふべし、粱肉を貪らず。
箕踞して散髪す、以て逍遥すべし。

終南は戸に當り、鷄峯は碧簪左簇の如く、退食の時、秀色紛として盤に墮ち、幾山泉は、牕を遶り厨に入り、孤枕の夢は回りて、驚いて雨聲を聞く也。

雲谷月空

雲は滿谷に生じて、月は長空を照らす。
足を洗ひ衣を収めて、正に是れ宴安の時節。

眉公山中に屋す、客あり問ふ、
山中何の景か最も奇なる。

曰はく、雨の後、露の前、花の朝、雪の夜と。
又問ふ、何事か最も奇なる。
曰はく、釣は鶴に因て守らしめ、
果は猿を遣りて収めしむ。と。

渓の響、松の聲、　淸聽は自ら遠し。
竹の冠、蘭の佩、　物色は倶に閑也。

偶ま蒲團に坐すれは、紙牎の上には、
月光漸く滿ちて、樹影は參差たり。

見る所は空に非ず色に非ず。
此時名衲門を敲くと雖とも、山童且つ報ずる勿れ。

會心の處、必しも遠きに在らず。
翳然たる林木、便ち自ら濠濮の間想あり。
覺えず鳥獸禽魚の、自ら來つて人に親むことを。

鐵笛吹殘

鐵笛吹き殘して、長嘯すること數聲、

空山響に答ふ。
胡麻飯し罷んで、高眠して一覺せば、
茂樹陰に屯す。
茅を編んで屋となし、石を疊んで階となす。
何處か風塵到るべき。
梧に據つて吟じ、茶を烹て話す。
此中幽興偏へに長し、
茶は白からんことを欲し、墨は黒からんことを欲し、
墨は輕からんことを欲し、茶は重からんことを欲し、

茶は新ならんことを欲し。墨は陳ならんことを欲す、
風臺を築いて避けんことを思ひ、
仙閣を搆えて圃に入る。
園中には奇花異石を辨する能はず、
惟だ一片の樹陰、半庭の蘚跡、
差心を會すべく、忘形の友來りて、
或は膝を捉つて劇論し、
或は掌を鼓して歡笑し、

或は彼れ談じて我れ聽き、
或は彼れ默して我れ喧しく、
而して賓主兩つながら忘ず。

簷前の綠蕉黃葵、
老少葉雞冠花、階砌に布滿す。
榻を移して之に對し、
或は石を枕にして高眠し、或は麈を捉つて淸話す。
門外車馬の塵漲々たる、了に相關せず。

山屋は城市に勝ると、蓋し八德あり、
苛禮を責めず、生客を見ず、
酒肉を混せず、田產を競はず、
炎涼を聞かず、曲直を鬧せず、
文逋を徵せず、士籍を談せず。

淨几明牕、一軸の畫、一囊の琴、
一隻の鶴、一甌の茶、一爐の香、
一部の法帖、小園の幽逕、
幾叢の花、幾群の鳥、

幾區の亭、幾卷の石、
幾池の水、幾片の閒雲。

巾を脱し頂を露はす、斑文竹籜の冠、
枕に倚り香を焚く、半臂華山の服ー

牕前の落月、戸外の垂蘿、
石畔の草根、橋頭の樹影、
立つべく臥すべく、坐すべく吟ずべし。

衡門の下、琴あり書あり、
載はち彈し載はち詠じて、
豈他の好なからんや、是の幽居を樂む。
朝には灌園をなし、夕には蓬廬に偃す。

因に舊廬を葺いて、渠を疏し泉を引き、
周らすに花木を以てし、其間に哦吟す。
故人過ぎり逢へば、茗を瀹いて奕棋し、
杯酒淋浪として、殆んと塵中の物に非ず。

林泉に獨臥し、曠然として自ら適せば、
利なく營なく、思ひ少く慾寡し。
脩身出世の法也。

丹山碧水の郷、月澗雲龕の品、
煩を滌し渇を消す、青山白雲、
何に在りとして、我が枕屏に非ざるや。

雨後捲簾看霽色。却疑苔影上花來。

竹影蕉陰

竹影簾に入つて、蕉陰檻に蔭す。
蒲團を取て一臥すれば、身の氷壺鮫室に在るを知らず。

江山風月、本と常主なし。
閒者便はち是れ主人。

室に入るは清風に許し、飲に對するは惟だ明月。

潭澗の間、清流注瀉して、
白石に漱いで、噴泉に枕す。
人をして濯々として、清虚日に來らしむ。

林泉の滸、風は萬點を飄へし、
清露晨に流れ、新桐初めて引く、
蕭然として無事、
閒に落花を掃ひ、人の懷を散ずるに足る。

貝葉之歌無礙蓮花之心不染。

茂樹終日

綠陰影を流して、清は神に入り、
香氣氤氳として、人の骨に徹す。
坐來天地、一時に寛うして、
間放風流、清福を享けり。

郊中の野坐は、固より荊に班すべく、
徑裡の閒談は、最も石を拂ふに宜し。
雲烟を侵して獨り冷かに、清嘯の胡床を移し開き、

草木を藉いて幽と成し、莊嚴の蓮座を撤し去る。
況んや乃ち琴を枕にして夜奏せば、逸韻更に揚り、
局を置いて午に敲けば、清聲甚だ遠し。
洵に幽棲の勝事にして、野客の虚位也。

山童は草木の性に率ひ、鶴と與に同じく眠り、
奚奴は歌詠の情を領して、韻を撿して至れり。

戸を閉ぢて書を讀めば、絶だ山に入り道を修ずるに勝り、
・人に逢ふて法を說けば、全く兀坐して心を捫するに輸す、

竹密何妨二水過一。山高不レ礙二雲飛一。

個趣個機

三日火を擧げず、十年衣を製せず、
正に是れ道を樂み貧に安んずるの賢士。
千人亦見、百人亦見る、
斯れ萃を拔き類を出づるの英雄となす。

長林に枕して史を披し、松子を飧となし、
豊草に入つて閒を投じ、蒲根服すべし。

心は竹と倶に空しく、貌は松と偕に共に痩す。

閒にして水竹雲山の主となり、

靜にして風花雪月の權を得。

水流れて意に任じ、境は常に靜也。

花落つる頻なりと雖ども、意自ら閒也。

個中の趣を會得せば、

五湖の烟月、盡く寸衷に入り、

眼前の機を破得すれば、

千古の英雄都べて掌握に歸す。

夕立の記

德川光圀

暮行く空も、晝の暑さの餘りにや、土さへ裂けて、いとからう、心地なやめるも、やる方なし。流るゝ汗は、たゆたふ浪や音なき河の、捨小舟、よるべ知られず、ゆたのたゆたに、身はゆだねて、何くれと、おきふす窓の、前には瓜も、すゝめつべ

く、足曳の、山の緑ももえて、わたつ海の、波もわき出づべう
おもほゆ。玉ぼこの、道行く人は、上となく下となく、女の男
の數を數を知らず。あるははぎ高く、もすそをかゝげ、ある
は胸打たゝき、をいきづきがちなるも、いと物ぐるほし。こ
れやこの、趙氏がまつりごちし、古へにはたかはらず夏の
日は、恐れつべしとうべもいひけりや。やをら音つるゝ、鳴
神の、うち過る跡より、降くる雨は、いとはしたなくて、そが
ひに見ゆめる、竹の葉風の、そよ更に、音づるゝは、瀑布の心
地するも、元之が竹樓の記、おぼえてあはれ深し。まなく晴
渡るも、いと名殘がちに、音づるゝ軒の雫は、氷をかゝぐる

なるべし。庭の淺茅に露おきまよひ、枝もたわゝに、打垂れ
髮の、亂るゝ玉は、えこそとゞめね。思ひかけずも、東の山の
端より、月のいとあかうさし出つゝ、おりし草木の、露のゆ
かりに、影をうつしぬるは、大江のもとつ人も、かす〳〵か
ぞふといひけん、古おと思ひ出ぬにもあらず。兎の毛も
數へつべく、吹くる風の涼しさに、夏の暑さも忘れ、いと心
よし。こゝにして、遊仙の枕を引よせて、しばしまどろみ入
りたるに、文の友なりけるものなむ、二人三人訪らひ出き
て、やよやかゝる、月見ぬ人も有けりな。いぎたなしやなど
むおに入くる音に、夢の浮橋渡しもはてず、ふと驚き起出

て、例のおあまづきに、よりねつゝ、一村過る雨に、暑さ忘れし、喜び打語らひて、蘇仙が喜雨亭の、ことに及べり。まあとに昔より、今の時に至るまで、其喜びをうるおとに物にえぼうしさせて、あれを忘れざるあとを示すにや、今宵しも晝の暑さ、忘れしあと、いみじう嬉し。其あとはひとしからざれども、忘れざるあとは、同じかるべし。殊更にやまと歌ずして、常に住む所の、右り左りの、壁に書付けつゝ、後かつ思ひ出むとあり。

みるが内に一村すぐる夕立の跡のかたみのつゆのすゞしさ

鳴神のおとばかりかと思ふ間にはや打すぐる夕だちのそら

萬里澄空。千峰開霽。山色如レ黛。風氣如レ秋。濃陰如レ幙。煙如レ縷。笛響如二鶴唳一。經颸如二喑喞聲一。温言如二春絮一。冷語如二寒氷一。此景不レ應二虚擲一。

晝寐の解

得巴、分

木にはねずといふ木あり、花にはねぶといふ花あり。我はその中に晝寐をたのしみて、うつら〳〵と寐ぬと思へど

おどろ〳〵して鼾かきたりといふ。寐たぞ寐ぬぞのあらそひは、おほかた寢ぬといふ人のまけ也。されば盧生がまくらの榮耀も、莊周がつくえの逍遙も皆たゞ夢の世の夢なれば、さめて理屈をいふ人よりも寐て居る内を極樂とや申さむ。まして露霜のおきまとひ、うば玉の夜を晝にして、春の夢の手枕をかこち、朝がほの秋をしらざらんよりも、時節到來の酒機嫌に、はなひ草でも詠ながら、とろり〳〵とひき入たらん、道に觀念のはじめとや申さむ。しかるに黄帝の晝寐をばとがめす、宰予は若氣の不機轉より、雪隱のたとへにひかれぬれば、古文眞寶の學問者は、螢にのぞき雪におゝえて、俳諧のおかしみをしらぬも本意なし。およそ晝寐の根元をきはむるに、ゆふべ夜遊の損にもよらず、けふ朝起の得にもよらす、食後一盃の汐時に、手の物もうち落すばかり、居ながらつり込なゝちなれば、枕もそなに肱をまげて、我たのしみを樂むとは申さむ。

偶向㆓水村江郭㆒。放㆓不繫之舟㆒。還泛㆓沙岸草橋㆒。吹㆓無孔之笛㆒。

竹夫人の傳

頁 壺峰

むかし琵琶湖の浮島に、宇賀長者のしとり娘あり、錦帳の

うちにひとゝなりて、終に參差の身をまけず、田樂の灰をもふまざりしが、一夜の雪の轉寐より、島の名なから住うかれ、行衛も白雲の郷をはなれて、藪里の片ほとりにさまよひたるを、竹取の翁にはこくまれて、雨にたもとのかはく日もなく、風にかつらもくしけづらず、木六竹八のあだ名たちて、鉈とやらんのからき目にあひ、鋸の音のうきふしにひかれて、果は籠つくりに身をまかせ、都も藪下の道具屋に賣れたるを、その比髭黑の大將とてしゝふとなる殿のおはしけるが、取賣の媒にめされて、すゞしの蚊帳になれまゐらせしに、本より仙女の芙蓉掌をさゝげて、風を

まねき露をふくめば、水無月のそらのたえがたきにも眞瓜葛水のかりそめにはあらで、大將大きにめで給へば、あまたのおもと人も紅粉を失ふ。かくては此殿も見過しがたく、帝にも啓し聞えさせ給へば、竹の翁のよしあればと竹夫人とはめじけるとぞ。されど秋風の吹につけて夜も長月のそら淋しく葛の上葉もあちらむく比は、おなじ心につかへぬる扇も閨の怨を殘して、殿の御けしきにもたがひぬるより、あやしき板敷のまろねがちに、今は籠の目のなみだもとゞめず、いかなる山里の一季奉公にもと、此世を思ひ果にしか、捨がたきすくせのちぎりにや、もろな

し船の、うき瀬にさそはれて、長安の市の出替宿に憂寐のふし〴〵をかぞへあかすに、花の三月もおもはしき口なく、身を卯の花の時鳥も鳴て、凌霄の花のもゆる比には、そこにも赤鬚の暑やみありて、山谷が家にかゝえられ、石牛洞のそこ寐には、鬚の因果を恨みながら、名をさへ青奴とかへられて、今さら冠者のさまながら、穠李昭華と寵を争ひしに、其人も遠流のことおこりて、此洞のひとり寐もあやしければと、菩提所の黄龍寺にあづけられしが、反故籠にや成果ぬらん。煤掃の後の行衛をしらず。

影法師

吐月

天あり、地あり、花あり、月あり、ものいはずして遅日長夜をなぐさむ。夫が中間にひとりの法師あり、よく人にまじはりて、したしからず疎からず、つれもなき岩木の峯につゝじ咲く比より、水雲のよるべなき杖を伴にし、あるは雨に宿かる、笠ぬひの里の假寐もかたみに袖をしぼる、さりや妹が垣根のたゝずまゐも、此法師には心をかず。まくらの外に、さゝめおと、うちなづかれたるも、いと耻かしき心地

やすらん。夫さへ忍むが岡の人めいぶせくや、木の間がくれの月とゝもに、その行かたのおぼつかなき折もありけり。しらず心何をか恨みけん、例にうしろむくこそあやしうおぼゆれ。されど、あふも淋しく逢ぬも又淋し。たゞ罔両ときけばうそきみわるく、影坊とよべばおかしみもありて、是とき俳諧の友なりけらし。

月見の賦

松尾芭蕉

ことし琵琶湖の月見むとて、
しばらく木曾寺にたび寐して、
膳所松本の人〳〵を催すに、
乙州は酒をたづさねて、　泉川に三日の名をつたへ、
正秀は茶をつゝみて、　信樂に一夜の夢をさます。
今宵は茶といひ酒といひ、　かたふの人も二泒にわかれて、
洒堂は灯にかたぶきて、　其茶に玉川が歌を詠じ、
丈草は月にうそふきて、　其酒に樂天か詩を吟ず、
支考は若く、　木節は老ひぬ。
智月は物のおぼつかなふ、　かつきのあまのなま浮びならず。
それが中にも惟然法師は、　酒におどろき茶に感じ、

ほむるもそしるも、　そらに風吹て、
爰に三子者の志をためざらんや。
まして其外の友とする人も、　峨々洋々の心ざしをしれば、
すべては飲中八仙のあそびならん。
誠や、　つれ〴〵の法師だに、
心をつくろはぬ友えらびは、　かゝる月見の仇なるや、
思ひしまゝの草の庵に、　浮世の外の風狂をつくせり。

　米くるゝ友をこよひの月の客

かくて三盃の興に乘じて、　湖水の月に船を浮べんと、
物このむ人の、　風情をそへたるに、
杖に瓢箪の唐子はなけれども、
扇に茶瓶の若男あれば、
赤壁の船のとぼしさにはあらざめり。
さゝ波や、　打出の濱の名にしあふ、
鏡の山もあなたにさしむかひ、　日枝は横川の杉につらなりて、
比良の高根は雁をもかぞへつべし。　石山の鏡はあはづの嵐にさえて、
うしろに音羽の峯たかく、
そこに楓橋の霜も置ぬらん。
矢橋の歸帆は、　今宵をもてなすに似たるべし。

　名月や湖水に浮ぶ七小町

されば我朝の紫式部は、　石山に源氏のおもかげを寫し、
唐國の蘇居士は、　西湖に越女のよそほひをたとふ。
いづれも風雅の名にのこりて、　今のまぼろしに浮(うかば)ざらんや、
實(げに)そも和漢の名蹤(めいしやう)なりけらし。
さて松本に船をさしよせて、　茶店の欄干に心をはなては、
目はよし蓬萊の水をへだてず、
身はたゞ芙蓉の露にうるほふ。
竹の林の酒も時ならで、　松が江の鱸(すゞき)はこよひなるをや。
猶はたかたぶく月の名殘には、
辛崎の松もひとりやたてる。

古き都の名もゆかしければ、　尾花川の明ぼのをこそと。
千那尚白をおどろかしぬれば、
夜ははや五更に過ぬべし。
　三井寺の門たゝかばやけふの月。
誠よ、推敲(すいかう)のむかしながら、　船にこよひの遊をおもへば、
此座に韓愈が文章をもあざむき、
賈島が詩賦をももどきぬべき、
詩人文客にとぼしからぬば、
たとへ赤壁の前後といふとも、
その心に此人をはづべきやと。

見ぬもろこしを相手にとりて、
今宵の風流をあらそふほどに、
月は長等山の木の間に入りぬ。

潭水寒生月。松風夜帶秋。

月宜寒潭。宜絶壁。宜高閣。宜平臺。宜牕紗。宜簾鉤。宜苔階。宜花砌。宜小酌。宜清談。宜長嘯。宜獨往。宜搔首。宜促膝。春月宜尊罍。夏月宜枕簟。秋月宜砧杵。冬月宜圖書。樓月宜簫。江月宜笛。寺院月宜笙。書齋月宜琴。閨闈月宜紗廚。勾欄月宜絃索。關山月宜帆檣。沙塲月宜刁斗。花月宜佳人。松月宜道者。蘿月宜隱逸。桂月宜俊英。山月宜老衲。湖月宜良朋。風月宜楊柳。雪月宜梅花。片月宜花梢。宜樓頭。宜淺水。宜杖藜。宜幽人。宜孤鴻。滿月宜江邊。宜綺筵。宜華登。宜醉客。宜妙妓。

名月辭

圭雨

人おゝろのさわがしきは、やゝ上弦と月の名の、
つく頃より名にしおふ、今宵はのどに、
中空の月の、あらんかぎりは、
曠野沙村、或は溪林海濱、

こゝにかしこに、　心迷ひ、
一夜一夜、　おもひ〳〵の興を配る。
夢にだに見まほしき月の、　ところおほかる中に、
こがね花咲とよみける、　みちのく山の月など語り出たる、
ことにはるかなる思ひせられて、　たぐひなくなつかし。
今宵は人々とともに、　文會てふ事をし、
名月の辞といふを、　題して遊ぶ。
おのれおときものの、　なにおとかうめき出ん。
かぎりなき月の思ひも、　みじかき筆にかきとむは、
桂をとての笑ひはづかしく、　龍田姫のとがめおそろし、

とてやみぬ。

茅屋竹牕。一榻清風邀㆑客。茶鐺薬竈。半簾明月窺㆑人。

龍女濯㆓冰綃㆒。一帶水痕寒不㆑耐。姮娥携㆓寶藥㆒。半嚢月魄影猶香。

相㆓美人㆒如㆑相㆑花。貴㆓清艶而有㆓若㆑遠若㆑近之思㆒。看㆓高人㆒如㆑看㆑竹。

貴㆓瀟洒而有㆓不㆑疎不㆑密之致㆒。

陰㆓茂樹㆒。濯㆓寒泉㆒。遡㆓冷風㆒。寧不㆓爽然灑然㆒。

仙人好㆓樓居㆒。須㆘岩嶢軒雪。八面玲瓏。舒目披襟。有㆗物外之觀。

霞表之勝㆖。宜㆑對㆑山。宜㆑臨㆑水。宜㆑待㆑月宜㆑觀㆑霞。宜㆓夕陽㆒。宜㆓雪月㆒。宜㆓

How often have I paus'd on every charm,
  The shelter'd cot, the cultivated farm,
The never-failing brook, the busy mill,
  The decent church that topt the neighbouring hill,
The hawthorn bush with seats beneath the shade,
  For talking age and whisp'ring lovers made!

"The Deserted Village"
Goldsmith.

岸幘觀書宜倚欄吹笛。宜焚香靜坐。宜揮麈清談。江干宜帆影。籠宜烟嵐。院落宜楊柳。寺觀宜松篁。溪邊宜漁樵。宜鷺鷥花前宜娉婷。宜鸜鵒。宜翠霧霏微。宜銀河清淺。宜萬里無雲長空如洗。宜千秋過雨。疊翠如新。宜高插江天。宜斜連城郭。宜開牕眺海日。宜露頂臥天風。宜嘯宜詠。宜終日敲棊。宜酒宜詩。宜清宵對榻。

農びぞ我が種々の寛工の上に休みえは、
木隱れたる村舍、耕されたる田圃、
決して息むときなき小川、忙はしき水車、
適宜の寺院近隣の丘に冠られつる、
山楂子の株ぞが木影の下に椅子ぞある、
昔の物語さては愛人に耳語く爲めに造られつる。

涼風萬斛

枯竹の我に對して風涼し　闌更
竹涼し古人迎ふる心あり　曉臺
涼し江に鰤(コノシロ)を打つ竿の雲　白雄
涼しさや鐘を離るゝ鐘の聲　蕪村
涼しさや夢にもさせす覺めもせす　秋瓜
村雨や鷄の尾振ふ暮涼し　保吉
見るにさへ涼し潮の浪に鳥　月居
涼しさや下駄も圓座も二人前　道彦
涼しさを言ひ初めにけり麥の飯　仝
涼じさの取りも直さぬ月夜哉　岳輅
長橋を搖られて涼し夜の鴽　平角

涼しさや浪一ツつゝ暮れて行く　玉屑
涼しきに退いて月置く圓座哉　素廸
涼しさや根笹に牛も繫かれて　蒼虬
涼風に癖の付いたる門田哉　仝
宿取りて暫く涼し膳の前　篤老
涼しさや蟬の取付く竹簾　魯隱
涼しさを忘れて寢たる木下哉　葵亭
涼しさや苫へ渡るも石傳ひ　鶯笠
鶯涼し離れて游ぶ心より　三津人
雲消えて涼しくなりぬ夜の門　冥也
涼しさをあまして人の寐る夜哉　綺石
涼しさや見る間に二つの星の飛ふ　梅人
月涼し離れ切つたる山の上　恒丸

螢か來て涼しくしたり椽の上　士朗
涼しさの一人に餘る庵哉　樗堂
涼しさに嬉しさに枕はつれけり　有篁
涼しさは田舍に見ゆる夫婦哉　巢兆

石枕松風

涼しさや我醉心月に入る　可都里
涼しさや搔きも盡せぬ松の塵　不騫
涼しさや千鳥の聲は夏のもの　定雅
ひた〳〵と涼しうなりし峠哉　鵜雪
風涼し枕ほとなる山越えて　雨考
涼しさや小蟹の登る笹の枝　文角
よき事は知らても涼し我心　女きよ

山風の涼し過ぎては人も來す　夢南

涼しさや膾の上に山の月　送秋

涼しさを添へて買はゝや夜網物　李尺

無腔短笛

木々に鳴く鳥や涼しう夕暮れる　抱朗

涼しさや山鳩なんと夢に來て　汝里

涼しさや嘶く馬に乘換へて　木老

涼しさや夢に打込む片男浪　孔榮

涼しさや小笹にうつる丸鏡　秀都

今植ゑた竹に客あり夕涼　柳居

松の葉もよみ盡すほと涼哉　女千代

腹赤き魚釣りに出ん夕涼　曉臺

蘆に乘る工夫して見る涼哉　烏醉

網打の見えすなり行く涼哉　蕪村

皿一つ氷に碎く涼哉　蓼太

下涼み月曬へす木の葉哉　闌更

船ゆるす醫師も見えて夕涼　几董

秣飼ふ間を馬士か涼哉　保吉

竹も今年雀も今年夕涼　斗入

袴着た人は似氣なし夕涼　梅人

篩風梳月

かくてなそ涼風宿れ肋骨　大江丸

涼めとて人のくれたる古泥障　五明

樂しさや竹を數へて夕涼　岱青

門涼蟾も親しきもの丶内　恒丸
そら話空挨拶や橋涼　存亞
漁火を數へて嫋か涼哉　士朗
涼み舟浪の動きに委すあり　丈左
片靡く松に柵かく涼哉　芳之
月代の寂しき方や涼舟　普成
人知らす千鳥聞きけり川涼　定雄

兩腋生風

身の上の鐘と知りつゝ夕涼　一茶
母ありと歸る者あり門涼　木海
夕涼茶碗の欠を掃せけり　蓼松
思ふほと物言はぬ人と涼みけり　百池

蓮飯の冷める内あり夕涼　護物
發句する工夫も散るや涼舟　魯隱
鳥の名を覺えて戻る涼哉　葵亭
撫子の品定めけり夕涼　女 志宇
あちらから乳を來てくれつ門涼　谷雄
鷺はたゝ奇麗な鳥そ夕涼　路因
涼臺月ある方を枕哉　雪髭

松氣健人

風薰るもたれ柱は檜哉　保吉
風薰る簑の輕さよ雨の跡　仝
橙のかへる青みや風薰る　道彥
犬に迯け犬を追ふ夜の涼哉　嵐雪

音涼し外て物搗く里の月　吐月
夕涼由々しき忘刀かな　完來
涼しさや帆を捨てゝ行く淡路島　乙兒
一長屋盗人迯けて夕涼　蓼太
水打つて月に主あり門涼　夜白
涼しさや寺には僧と松ばかり　巴丈
千鳥啼く也と吟して涼かな　文足
誰か船と問はれ顔なり夕涼　吐月
我一人雨夜に成りぬ涼舟　完來
夕涼隣寂しう鎖しけり　布谷
涼しさや掻きも盡きぬ松の塵　不騫
夕涼動かぬ船もなかりけり　寥茂
夕涼茶碗の欠を掃せけり　寥松

鬚眉皆碧

涼取る果は我家に坐りけり　大江丸
月の出て知る人多き涼かな　吐月
涼しさや客仕舞ひたる井の車　蓼太
蟻の來ぬ晝の筵や下涼　斑象
珍しい道も歩ます夕涼　曉長
行く水を嬲る座頭の涼哉　他力
契情や傾城を見る夕涼　百里
夕涼女に隔つ敷居かな　秋兎
呼易き名は呼れけり門涼　一巣
灯ともさぬ家並ひけり夕涼　貞松
事足りぬ一人涼に月と影　竹阿

子は親に里の名問ふて涼哉　竹人
月の出も見えて涼しや松の間　士朗
涼しさや小松か中の朝雀　荆父
暮一の鞠蹴けて出たり夕涼　普成
夕涼柳手繰りて筏まて　玄路
嫁連れて引合せけり門涼　月守
肘掛けて我橋顔や夕涼　兎月

撫松看雲

涼しさは椎透したる月夜哉　青朝
雷の上に涼しや峯の寺　露澄
涼しさや寺は碁石の音はかり　蓼太
岩鼻や星摘むはかり夕涼　月巣

夕涼橋の裏見る小舟哉　有巣
門涼四條の月を問れけり　業古
水賣れは水買ふ江戸の涼哉　季鳴
夕涼魚墨を呑む都かな　寥松
默つても居らるゝものよ門涼　菅雅
川上や香煎匂ふ夕すゝみ　雨人
あてもなく舟乗り出すや夕涼　龜息
消かゝる行燈凄し門すゝみ　迎月
暮の月牛涼ますや門の川　可卜
水打ちて我門と思ふ風涼し　雲下
つくほうて痿痺されけり門涼　作者不知
薄へりをのいてかしけり門涼　周瓜
夕顔に足さはりけり涼床　蝶聲

川床や引すりありく夕涼　可能
武夫の胸毛あらはに夕涼　作者不知
丸腰に神主出たり夕涼　玄兎
いたずらに榊手折りぬ夕涼　素郷
團扇にて膝たゝきけり夕涼　羽白
立たれは帶の拔たり夕涼　芋月

蕉天苔地

涼しさや群集の中に水の月　四條納涼　定雅
硝子の音こそさゝれ川涼　麒北
笹の葉のそよく御手洗團子哉　加茂納涼　朴二
川蓼や糺の茶屋か一夜すし　紫曉
涼しくも朝月拜む川邊かな　木越

涼しくも門田みありく月夜哉　砂旭
涼しさに家ほしと思ふ磯邊哉　杜由
涼しさや寐てゐる上を鳥行く　寸來
山蟻よ涼しき夢をせゝるまし　馬瓢
涼しさや鬢に立たる青松葉　馬吹
涼しさや松葉ふみ行く寺の門　松濤
涼しさや寺は談義のすみし跡　羽立
雲の峯崩れてもとの山涼し　魯川
涼しさや灯をとほし行く竹の中　晉秋
涼しさや紙帳ふくるゝ小夜嵐　何遠
涼しさや夕立おから入日影　去來
人影のちらりと涼し竹の中　涼菟
涼しさや船に船頭の散らし髮　其角

涼しさや牛の尾振りて川の中　萬乎

涼しさや竹握り行く藪つたひ　半殘

涼しさや椽から足をふら下ける　支考

涼しさや塀にまたかる竹の枝　卯七

涼しさや風待つ船の帆拵　正秀

帷子の背中ふくるゝ風涼し　衛門

涼しさを舞うて見せたり水車　木因

涼しさや障子に響く水の音　一有

腰掛けて中に涼しき階子哉　酒堂

涼風は目出たき時の心かな　童平

涼しさや竿に纏るゝ釣の糸　蝶夢

涼しさや旅へ出る日の朝ほらけ　樗良

涼しさや夢にもさせす覺めもせす　秋瓜

松冷集雲

松陰に人待つ振の涼哉　野披

涼しさに四つ橋を四つ渡りけり　來山

破風口に日影や弱る夕涼　芭蕉

夕涼よくぞ男に生れける　松濤

蚊帳を出て最一度涼む戸口哉　士芳

夜涼や向の店は月か射す　里圃

突立つて帆になる袖や涼舟　丈草

鬧しい中を出抜くる涼かな　游刀

昼に墨付く兒の涼哉　千那

中間の堀を見て居る夕涼　木導

夕涼夕顔一つ見出しけり　乙由

是てこそ命もつゝけ夕涼　兎士
日枝下し受けて賣る夜や涼床　盧元
今植ゑた竹に客ありゆふ涼　柳居
祇園會や人の人中月出づる　一草
花は皆蕾んで月の蓮哉　闌更
蓮咲いて賤き水はあかりけり　烏醉
分入るや浮葉乘越す蓮見舟　几董
白蓮に人影さはる夜明哉　蓼太
吹売の浮葉に煙る蓮見哉　蕪村
日最中や蓮の葉分の風渡る　花縣
白蓮に夕暮蔭る嵐哉　白雄
人涼し蓮の上行く山桂　宗讃
白蓮の怪しき迄に靜なり　烏明

白蓮に傘疊む夜明哉　保吉
村雨は月の上あり蓮の花　斗入
あらけなき音聞く雨の蓮哉　士朗
晝眠る身の尊さよ蓮の花　仝

魚影水鑑

山本や白き蓮伐る朝月夜　恒丸
美しい心を遷す蓮哉　仝
月と水中靜あり咲く蓮哉　舍洲
蓮の香に女帷子被りけり　成美
鹽魚の臺所まで夏の月　淇園
又となや月夜に起て蓮を切る　葛三
朝朗露搖り据て蓮匂ふ　道彦

朝雨の中に浮きけり蓮の露　與洲
丘の家や蓮に吹れて夕茶漬　一茶
蝶鳥になふられもせす蓮の花　壽翁
寐轉へと枕くれけり蓮の花　床太

淡雲涼月

夏の夜は弓張月に始りぬ　巣兆
夏の夜を毎日松の朝日哉　成美
いつまでも夏の夜はあれ水と月　葵亭
夏の夜は鷺か飛んでも明にけり　椿堂
川向ひ見て居るは誰そ夏の月　樗良
買つて來た竹に添えたり夏の月　蓼太
遠淺に兵船や夏の月　蕪村

夜水とは里人聲や夏の月　仝
蛇を蹈みしは誰か子夏の月　白雄
町中を走る流よ夏の月　仝

孤揖沿流

水のほる雲筋消えて夏の月　闌更
夏の月人には言はぬ小道哉　斗入
丸帶の結ふも易し夏の月　五明
夏の月ぬれ〳〵しくも見ゆる哉　士朗
船の灯の上に更けたり夏の月　恒丸
白鷺の蹈へて寢たり夏の月　葦泊
はしたなく戸は鎖したりな夏の月　兄直
舟人に有明問ん夏の月　完來

夏の月我家暗う戻りけり　午心

芒植て静にせはや夏の月　可都里

手に取らは消もやすらん夏の月　道彦

傾くを寐る期にせはや夏の月　月居

山の井に翌迄殘れ夏の月　乙二

夏の月さて出かましき草木哉　月花

繪水繪月

夏の月竹の奥にも誰か在る　岳輅

出るより打傾きて夏の月　葵亭

夏の月松より出てぬ早更けぬ　椿堂

夏の月いつも圓しと思ひけり　幽嘯

さんふりと網かふせけり夏の月　三津人

汲こぼす井筒に涼し夏の月　蘿狀

松涼し一夜々々の月の形　双烏

小屏風の見えて山家の夏の月　千崖

夏の月柳ひんなう成にけり　胡準

我庵は住みよかりけり夏の月　岩苔

脛の毛の濡るゝまて見よ夏の月　丈馬

消ゐさうな夏の月夜や蚯蚓鳴く　眼蛙

夏の月濡腐りてそ光りける　心非

外へ出て若くならうそ夏の月　金堤

月の夜は夏の事なり櫂枕　曙堂

萍を我はめくりて夏の月　扇暑

余り見て寂しうしたり夏の月　禾葉

田あるきや夏は月夜の惜しきもの　我風

夏の月思はぬ方に明にけり　鴛風

銀河水簾

身一つに隙あき蟵の四隅哉　蓼太

客立つて蟵釣り惜む月夜哉　仝

蟵を出て内に居ぬ身の夜は明けぬ　蕪村

暫くは高き枕を夏の月　白雄

憎るゝ蚊よりも蟵の工み哉　保吉

寢て居れは月に成りけり蟵の内　恒丸

蚊屋の月汐手の小風かよふ哉　長翠

月は蚊屋に置いてそろりと出にけり　樗堂

引寄せて松葉刺しけり蚊帳の穴　仝

靜雲淺夢

隔れは物のなつかし蚊帳の月　丈方

蚊帳の月畏多くも眺めけり　午心

雨の夜は蟵の模樣の替りけり　女雨柳

笘の戸や蚊帳にも懸る朝の雲　三津人

水からも野からも出たり蟵の風　麥太

醉覺や蟵帳にからまる山の裾　古彥

葛衣紈扇

人稀に紙帳も明けり竹の奧　素丸

松風の一ト吹籠る紙帳哉　女遊好

膝形りにふくれて寂し夏衣　五明

蟬の羽や世の人眞似の夏衣　長翠
袖褄の芙蓉に似たり白縮　白麻
帷子に屢竹の夜風哉　雉啄
帷子や帆の夕風を衣桁まで　我風

雲卷雲舒

夕立の我に疎くと蓮の上　奇淵
兎角してはした夕立はかりなり　一茶
夕立に蔦吹騷く柱哉　幽嘯
夕立の裏を見て行く峠哉　歸堂
夕立のそも大きなる心哉　太笻
夏の雨竹より雲の起りけり　呉山
夕立や門脇殿の人たまり　蕪村

斧の音麓の里は夕立す　保吉
夕立や繩打散らし〳〵　梅人
廣庭や夕立の跡の松柏　祐昌
夕立や靜にありく筏さし　居龍

一皷天風

渡呼ふ草の彼方の扇哉　蕪村
片手綱馬上に扇見事なり　白雄
鯉洗ふ座敷に鳴らす扇哉　春鴻
醉狂して牛の角打つ扇哉　保吉
夕暮の腮に突張る扇哉　一茶
雨譽めて屢疊む扇哉　寥松
月影の映れは濡るゝ扇哉　鶯笠

小波を相手に開く扇哉　六珈
手すさひに團扇描かん草の汁　蕪村
轉た寐の夢想書き取る團扇哉　几董
白團扇隣の羲之に書れけり　大江丸
光琳か千鳥啼くなり古團扇　士朗
團扇持つ人の心はやはらかき　成美
團扇取る手に動かすや宵の星　葵亭
海山を動かして居る團扇哉　呉天

長晝如年

掛香や啞の娘の人となり　蕪村
弓取の帶の細さよ簟　仝
[illegible]うしろは月の出てにけり　羽琴

香ふりて竹に風聞かん簟　五明
簟月を客居に直しけり　午心
乙姫の床にもかへし簟　道彦
人君と夜は引寄せつ竹婦人　蓼太
鴛と寢た夜を語れ竹婦人　三津人

几簟皆綠

野山より市のものなり夏の月　蓼太
人込を歌舞伎役者や夏の月　莊丹
樹々に添ふ影こそ好けれ夏の月　茂林
譽めて居る雨から出たり夏の月　出幸
迷子の知人出たり夏の月　菊二
夏の月好い宿取りて寐さりけり　普成

嬰兒の好き花持てり夏の月　完來
危なしと出てた橋あり夏の月　斗水
夏の月船のたはしの流れけり　寥松
夜もすから簓洗ふや夏の月　呉春
雲水僧厠洗ふや夏の月　大江丸
ともかくも宵の事なり夏の月　南養
濡雨戸繰返しけり夏の月　幸橋
夏の月串に鰕差す磯家哉　魚房
口辷る昔の戀や夏の月　大江丸

空翠撲人

夏山や白きものには瀧ばかり　咸里
雨暫し栗も落ちす夏の山　步月

夏の野や引違ひ行く馬の息　技直
玉水のほち〳〵眠し白丁花　斑象
夏更に日暮れて物を急くなり　大江丸
春寒を我物顔や日傘　石意
大竹や人は眠たき五六月　吏登
六月や夕飯過の一風情　寥松
夏の旅夜明そ月は面白き　菅雅

蕉衫如雪

祇園會や神代も聞かす今の京　吐月
寐ぬ顏の猶美しや鉾の稚子　豪山
夕顏や浴を圍ふ戸一枚　午心
夕顏や待人持つて咲急く　班象

我戀や口も吸はれぬ青鬼灯　嵐雪
奈良に又一重の花の晒哉　夏來
秋近き月夜に成りぬ晒川　女菫路
富士の雪見て造りけん一夜酒　蓼太
瓜の皮水あさき四條川原かな　完來
風添へて木に蔭賣るや心太　梅素
水を出て水より涼し心太　菊丸
柳見え清水見えたる暑かな　吏登
餘り又素直も寂し竹婦人　一兮
白雪と寐た夜を語れ竹婦人　月巢
晒し井や車聞るゝ宵のほと　蓼太

鷗邊鷺背

夕立や濡色見せて植木賣　吐月
夕立や思切つたる傘の音　千牛
夕立や裸て走る人一人　山幸
夕立や後に暫く雨涼し　歌白
夕立や晴れて暫く松に風　楚水
山寺や夕立過の鷄の聞　故流
夕立や美事に濡れて芝肴　午心
夕立や濡れて打込む二の碇　宜麥
夕立や空も落來る最上川　柳美
虫干や鏡冷せは水の月　山朝

石澗林瀑

石を押す夜の響や苔清水　蓼太

湧くよりも流れて多き清水哉　暁長
宿借りて蚊帳に清水の漏る夜哉　雪萬
煮返る田井の中から清水哉　葛人
杖立てゝ逆うて見る清水哉　六窓
一筋は出温泉に落合ふ清水哉　班象

涼影參差

錦鱗に變へぬ裸や竹婦人　吐月
抱籠や夜明けて見れは花芒　莎笠
夕立や障子懸けたる片庇　嵐雪
夕立に下りても行かす牛の主　束登
夕立やあゆみを走る船の蟹　天府
夕立や川鳴らし來る一嵐　桑古

夕立の後から濡れぬ牛一つ　百鏡
秋風の劒に寫る土用かな　秋杵

碧玉潺湲

或僧を清水に沿うて尋ねけり　麥太
一寸の塵も止めぬ清水かな　五舟
西行の筐（かたみ）も涼し苔清水　楚狂
際付けて淺黄涼しき清水かな　月守
足浸す鳥美しき清水かな　其牛
人音に猪の遁行く清水かな　束登
苔踏んて窪む中から清水哉　蓮佐
動かせは石に音あり苔清水　麥巴
結ふ時松に風ある清水哉　至涼

逆らうて蟹の流るゝ清水哉　盤中
手して汲むほとあそ出れ苔清水　金羽
家二つ中に流るゝ清水哉　蓼太

氷絲雪藕

白蓮に人影障る夜明かな　蓼太
折くれる蓮より清き心かな　一鶯
蓮咲いて涼し散る間も亦涼し　吐月
蓮の葉や水無月ならぬ雨の音　蓼太
琵琶に降る音とこそ聞け蓮の雨　午心

如幻如電

丸いのは都の山や雲の峯　扇風
大佛に向ひ合てや雲の峯　杏水
海原や佐渡につゝいて雲の峯　只有
我笠の上にあふなし雲の峯　二松
夕立や西に晴れたる峯の松　白麻
夕立や松の赤葉をうち落し　成美
夕立や下京は草の露もなし　附風

涼氣沁骨

銀屛の光涼しき夕立哉　馬來
夕立やすは四つ橋の四つの音　春甫
夕立や瘧忘れし心もち　東走
白雨やしつかに出る蟇　作者不知
雨乞の大皷よわりし夕日哉　督華

葛の葉の淺黄にうつる清水哉　李雨
山鳥の影靜かなる清水哉　龜文
馬の耳すほめて向ふ清水哉　龜兄
情なや清水の中を牛よきる　其巖
打水や數寄屋のうへに朝の月　東籬
打水の石に光るや四日月　宗讃
葛水や顋に玉の雫せり　道立
水賣や桶にたゝよふ笹涼し　錦水
水飯に氣味よき箸の雫かな　菊隱

金露銀露

散る蓮や水しつまりて月の上　鷺橋
蓮の香や水の泡立つ午時の鐘　桂蘭

蓮の葉や一物もなく廣けたり　麥土
金色の螢飛ひけり蓮の花　松綢
蓮の花切れは糸ふく嵐かな　五來
窓中に晝寐の夢や簟　芭蕉
居交りて尻冷さはや簟　先放
虫干や三千餘卷一嵐　作者不知

過雲跳珠

夕立に走り下るや竹の蟻　文草
白雨に飛退く月や松の上　仝
夕立や洗ひ分けたる土の色　其角
夕立や鐘聞きはつす日の夕　史邦
夕立は繪に書く雨の姿かな　桃隣

白雨や散らし懸けたる竹の皮　曉烏
夕立に躍出てけり心太　許六
夕立や大竹原を走る音　康工
白雨や川追上くる裸馬　正秀
白雨に家流したる乞食哉　巴風
白雨や空を洗ふて月にする　一紅

如笏如矛

壁塗の鏝の動きや雲の峯　闇指
照り負けて夕立雲の崩れけり　猿雖
雲の峯何ほ嵐のくつしても　鬼貫
野社に大皷打ちけり雲の峯　北枝
白雨の雲や曾根太郎曾根次郎　許六

鞠ほとかあれにありけり雲の峯　凉菟
松杉を譽めてや風の薫る音　芭蕉
小波や風の薫の相柏子　仝
風薫れはしりの下の石疊　轍士

水落石出

水打つや蟬も雀も濡るゝほと　其角
さゝれ蟹足這上る清水哉　芭蕉
先つ馬の沓しめし行く清水哉　猿雖
高念佛申す峠の清水哉　翁扇
鷹匠の走り着きたる清水哉　徐寅
桶當てゝ置いて留守也苔清水　門瑟
晒井や底から寒い人の聲　桐雨

涼

終

明治卅四年七月四日印刷
明治卅四年七月七日發行

定價拾五錢

不許複製

編者 國府種德

發行者 東京市神田區猿樂町二十五番地 若林鑒太郎

印刷者 東京市神田區錦町二丁目三番地 池田良藏

發行所 東京市神田區猿樂町二十五番地 中庸堂書店

印刷所 東京市神田區錦町二丁目三番地 知足堂

大賣捌
東京 警醒社 東京堂 上田屋 岡崎屋
大坂 大坂西區新町通 福音社

東京評論社編

人道之偉人

定價三拾錢
郵稅四錢

東京毎日新聞評――前きに東京評論社の諸氏が人道の爲めに其一身を献したる歐米の高士烈婦を擇み之を同誌上に連載したりし者を更らに綴りて『人道之偉人』と題せり米國奴隷廢止の卒先者ガリソンあり監獄改良家ハワードあり赤十字社の種子を播きたるナイチンゲールあり救世軍の大將ブースあり文豪ゾラあり又彼博愛主義を唱道して近く露國國教より破門を宣告せられ今や世界環視の間に露國皇帝と闘ひつゝあるトルストイありサスガ評論社諸氏の手に成れる者とて文裏同情溢れ筆端血熱迸るの感あり若し夫れ青年學生綠樹の蔭に滊車に窓に之を繙かば腋下涼を覺へて惰氣忽ちに去る者あらん試に一本を購ふて暑中旅行の伴侶とせよ